
ティンガタンガ～さいはての神の島～

天川ミニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティンガタンガくさいはての神の島く

【Nコード】

N9881X

【作者名】

天川ミニー

【あらすじ】

世界の果てには神様の住む島がある。そんな伝承の残る世界で生まれた奴隷の子、十二歳の少年ラタは、売られる途中の航海で海に落ち、奇妙な島に漂着。そこで不思議な卵を拾う。なんと中から生まれたのは赤ん坊で、しかも神様の子だと言うのだ。乳母としてその子を守り育てる役目を言い渡され、ラタはその島こそが神の島ティンガタンガであることを知るのだった。ほっこり、癒し系の神様育てファンタジー。(第10回BOX - Air 新人賞落選作品)

ストーリーシノプシス(全あらすじ)(前書き)

こちらはストーリーの最後までを記したあらすじです。ネタバレに注意。本編から読まれる方は、次のページからご覧下さい。

ストーリーシノプシス（全あらすじ）

世界の果てには神様たちの住む島がある。そんな伝承の残る地に生まれた奴隷の子、十二歳のラタは、売られてゆく途中に嵐にあり、船から転落。目が覚めたらどこかの島に流れ着いていた。そばには極彩色の不思議な卵が落ちており、拾い上げると同時に割れてしまふ。中から生まれ出たのはなんと、人間の赤ん坊に見える生き物だった。周囲には誰もおらず、仕方なしに赤ん坊を抱いて歩くうち、ラタは大きな宮殿にたどり着いた。そこでラタは、まさにここが神の島ティンガタンガであり、次なる神の子が宿った卵（赤ん坊）に自分が呼び寄せられたのだということを知る。

神の子は人間の手で育てられ、成体となる。それまでの一年間、^{ファルマ}乳母として育てる役目をラタが負ったのだと。最初は拒否するも、島独特のほんわかしたムードと神様たちの陽気さに流されていくラタ。どうせ売られゆく奴隷であり、天涯孤独だった自分に役目ができたのなら、とにかく全うしてみようと決意するのだった。

それから、ラタの神様育ての日々が始まった。神の子とはいえ、成体となるまでは人間とほぼ同じ。寝る、泣く、排泄する、を繰り返す赤ん坊の世話は大変である。ただ一つだけ違うのは彼らが食物ではなく、人間のファル（心と体のエネルギー、愛情みたいなもの）を栄養として育つことだった。

ファルを与える方法は体のどこかにキスすること。赤ん坊は女の子で、戸惑いつつラタは額や頬にキスをし、ファルを与えることにした。

日々の世話以外にも、赤ん坊の名付け、一歳の祝宴、成長祈願などの様々な行事ごとをこなすはめになるラタ。ひと月でほぼ一年分

(一歳)の発達を見せる神の子(ニーナと命名)は、どんどん愛らしい少女へと育っていく。人と同じ食事を楽しみとして取ることもできるようになるが、日に何度かファルをねだることは変わらない。どきまぎしながらも、子供として、妹として、という意識でラタは乳母の役を続ける。一人前の神になれるよう、時折こなさなくてはいけない試練(洞窟に神の石を取りに行く、海の生き物を支配し、命令を聞かせる、渦巻きを起こし、水柱を立たせる、など)に段階を踏んで挑戦するニーナ。時に泣き、また時に笑いながら、ラタとニーナの一年はあつという間に過ぎていく。

最後の難関、人間たちの暮らす陸地で神の奇跡を起こすこと、をこなしたニーナは無事成体(背中に鳥の翼、人間の上半身、魚の下半身という姿。普段は人間の姿もとれる)になり、ラタとの別れが。しかしニーナはラタの唇にキスをし、求婚する。実は、神の子は両性どちらにもなることができ、歴代の乳母と結婚することが多いというのだ。人と神、双方が結びつくことでより強い力が生まれ、二つの世界が守られると。両思いであった二人は結婚。神の寿命を分け与えられたラタは、ニーナと共に神の島で楽しくにぎやかに暮らすのだった。ほのぼの、癒し系。神様育てファンタジー

一話 神の子

昔むかし、そのまた昔……あるところにラタというスジャブ人がおったとき。

鶯色の短い巻き毛に陶器のような白い肌をした、美しく心優しい少年。そんなラタは、神々のお気に入り。ラタも信心深く、いつも太陽の神殿へ祈りを欠かさなかつたという。

ラタが生まれた頃にはまだこの世に海というものがなく、人間はどこへでも歩いて行けたのだそうだ。しかしある時、幾多の神々と人々が些細なことから争いごとを起こし、太陽の神からきついお叱りを受けた。それはそれは大きな日照りが起こつたのだ。作物はとれず、花々も水も枯れた。ラタも人々も必死に祈つた。

すると祈りが通じ、天から恵みの雨が降り注いだ。長らく続いた雨により、地上には大きな大きな水溜りができた。大層塩辛く、深い水溜りは更に広がり、神の住む地と人の地とを分けた。それがいつしか海と呼ばれるようになり、人々が神も祈りも忘れゆくと、神々は海の方この島へとお隠れになつてしまつたのだそうだ。それでも神々のお気に入りラタと彼の血を引く者たちだけは、神々の声を聞くことができる力を受け継いだ。さいはての神の島、ティンガタンガへ誘つる声。。。

*

世界の果てには、神様の島があるという。そこには飢えも日照りも貧乏もなく、代わりに瑞々しい果物と色鮮やかな花々があふれ、陽気で楽しい神様たちの暮らしが営まれているのだと。

南洋の遙か彼方まで、伝承を信じて漕ぎ出して行つた人々は数知れず。しかしその誰一人として、戻ってきた者はいなかつた。だからラタも物語がおとぎ話としてしか、神の島を考えたことはなかつ

た。もう十二になったのだし、一人前の男として自分の人生に責任を持つ立場にある。それゆえににいるかいないかもわからない神様に何かを願ったり、祈ったりする必要も感じなかった。

(まったく、無駄なことやってるよなあ)

それは正直な感想だった。ラタの仲間たちが、右往左往する姿を見ての。いや、そもそも仲間などという単語も使うべきではないのだろう。だって元々自分たちは、奴隷商人たちによって買われ、売られ、あちこちに点々と消えていく運命の集合体。たった一時の儂い関係にしか過ぎない。たとえ自分が、生まれた時からこの船しか知らず、奴隷商人であるアイマスを親方と慕う暮らしをしてきたとしても。

「おい、ラタ。何をぼさつとしてる！ 早くエル椰子の実を盛らんか！」

当のアイマスに小突かれ、ラタはあわてて木箱の積んである方角へ走り、合計五つものそれを器用に抱えて戻った。一、三、五。お供えは奇数だと決まっている。一個では申し訳ないし、三個ではケチだと港の漁師たちに笑われる。だからアイマスの船ではいつも五個と決まっていた。数ある椰子の中でも特に大きく甘い汁を持つエルの実や、籠一杯のオリーブ、柑橘系の果実。獲れたての魚や海藻、それに月桂樹の枝。等々を港の船着場、決められた場所にしっかりと供え棚に飾りつける。そして地面にひれ伏すように三度、深々と礼をするのだ。

「海と人をお守りくださる神々よ。さいはての神の島、ティンガタングアよ。どうぞ我らにご加護を。航海と商売に、幸運と吉風をお与えくださいませ」

何度も何度も呟くように言って、祈る。普段は強面でやり手の奴隷商人であるアイマスの、意外な一面である。物心ついた時にはもう彼に引き取られ、手伝いをしながら今日までを共に過ごしたラタにとっては慣れたものだが、他の者は皆そう言って驚いた。

しかし、概して漁師や商人といった、海と密に暮らす者たちは皆、

信心深いことが多かった。彼らの祖父母や語り部から繰り返し聞かされてきたという、神話の影響によるものかもしれない。お祈りを忘れた船がたちまち転覆したとか、わざと偶数の供え物をした船が海賊に襲われたとか。小さな話ならまだしも、神の島ティンガタンガを探し、支配下においてやるうなどと考えた歴代の王や彼らの軍勢が、あつという間に大嵐で一網打尽にされてしまったなど　恐ろしい語り伝えも多々あったからだ。

（本当にティンガタンガなんて、あるのかな）

ふう、とため息をつきながらも、ラタも同じようにひれ伏す。心では疑っても決して声には出せない。神様が怖いからではない。アイマスにぶん殴られるからだ。

（でも、親方とも明日でお別れか）

十二になつた者は売られていく。それが奴隷のさだめである。五つ、六つの頃から売り飛ばすような闇買人も少なくはないが、一応アイマスは正規の許可証を持った奴隷商だ。せめて彼に拾われただけでも幸運だったのかもしれない。そう思うことにしよう、といったものように思考を締めくくる。決められた手順で供え物を海に流しながら、ラタは小さくため息をもらした。

じりじりと焦げ付くような太陽光が、木造船の甲板に降り注いでいる。中央大陸の中でも一、二を誇る大きな都、ネーブを目指しての船旅だ。ラタを含む数人を、そこで開かれる奴隷市に出すために先を急いでいるのだ。これまで旅してきた大陸東部に比べ、南に位置するネーブは格段と暑い。それは海上の天気だけでも十分予測できることだった。ただ、風があるために、それほどの不快感はないのが救いではあるが。

「ラタよ、ちよつと来いや」

アイマスに呼ばれ、ラタは顔を上げた。勇壮にはためく帆を見やりながら、掃除用具を出したところだった。いいから、というように手招きされて付いていく。船室で出されたのは、新しい腰布と上

等の葡萄酒だった。

「でも親方……僕まだ」

「ああ？ 飲酒年齢じゃねえってか？ なーに無粋なこと抜かしてやがる。十五も十二も同じだ。男が単身生きてくって日にゃあな、年なんて関係ねえんだよ。ほれ、ぐいっと飲みねえ」

「ど、どうも……」

最後まで言う前にドボドボと注がれた杯に、ためらいつつ口をつける。アイマスがゲンコツを振り上げる真似をしたので、あわててぐいっと飲み干した。喉から体全体がかあつと熱くなり、ふらふらと眩暈がした。

「お前は脱走しようともせず、いつも黙々とよく働いてくれた。こんなあこぎな商売はしちゃあいても、このアイマス、人を見る目だけはあると自負している。お前は大物になる。間違いない。だからみなしごのお前を一目見た時、『ラタ』って名付けたんだからな。おお！ よく似合ってるじゃねえか」

促され、履き替えた腰布は洗い立てで、お日様の匂いがする清潔なものだった。

「奴隷を使おうってんだから、まあどこかの金持ちがお前を買ったことになるだろう。でもなあ、ラタ。近頃じゃあ昔ほどひどい扱いはされなくなった。貴人にあるまじき振る舞いは、流行りじゃないんだとよ」

最後の言葉は小馬鹿にするような口調で言い、アイマスはつとラタを見上げた。

座ったままの彼の隣に、腰掛けるように手招きをされる。近寄ると真剣な顔で囁かれた。

「けだよラタ、お前結構可愛らしい顔してっから、気いつけんだぞ？ 神々のお気に入りじゃなく、他の誰かのそれになんねえようにな」

「神々の……って、いつも親方が言ってるあの昔話？」

「おうよ。俺のばあさまが村の語り部から聞いた話だ。お前は顔も

女みてえに整ってるし、鳶色の短い巻き毛もスジャブの生まれなこともそれにそっくりだったからな」

「ふうん。でも、気をつけるって何を？」

「そりゃあほら、あっちの趣味の奴らに決まってるーな」

目配せに意味深な微笑。それでもまだよくわかっていないラタに、アイマスは答えを耳打ちした。たちまち、ラタが目を剥いて渋面を作る。そういえば、と船乗りたちにそれらしい誘いをかけられたことを思い出した。あの時はアイマスが睨みを利かせて追っ払ってくれたのだが。

（そうか……この船には親方が選んだ人間しか乗せられないから、気づかなかった）

あまり考えなかった　というよりも、日の出から日の入りまで働きづめの生活で、考える余裕がなかった　事柄までも、これからは自分で気をつけていかなくはないのだ。つくづく、アイマスに育てられた恩を感じた。小柄でまだ未成熟な自分の体をかばうような仕草をするラタを、太い声がガハハと笑う。

「まあ、それは冗談としてもだ。とにかく真面目に頑張ってるじゃあ、解放奴隷になれる可能性だってある。しっかりな、ラタ。明日じゃ忙しくて言えねえだろうから、今言っておく」

頑張れよ　優しい眼差しで、アイマスは言った。大きくて分厚い掌が、ラタの鳶色の巻き毛を撫でる。記憶にもない父親というのは、こんな感じだっただろうか、などと思っただけなら涙が出そうになった。そしてこれが、アイマスと交わした最後の会話になった。

翌朝、まだ日が昇るか昇らないかという時刻のことだった。売られる日の奴隷は、遅くまで寝ていてもいい。そんな慣わしを忘れ、つい今まで通り一番先に飛び起きたラタは、不吉な雷鳴を聞いた。もうすぐネーブの港が見えてくるはずが、見渡すとあたり一面はまだ海に囲まれている。暗い海面はどこまでも続き、どんよりとした曇り空が広がる。

稲妻が何度か閃き、甲板に出たラタの頭には、もう雨の一滴が落ちてきた。始まってしまつてしまうと後は早い。まさにあつという間に激しい雨が叩きつけ、船は揺れ始めた。

皆を起こしに行こうと船室へ向かう。が、そのラタを横殴りの雨と風が襲つた。すぐに先も見えないぐらいの嵐になる。

(おかしい。いくら何でもこんな急に……)

いつもと違う天気、妙な恐れを抱いた。それでもなんとか起き上がり、アイマスの元へ急ごうとした。その瞬間だった。

遠い海上、遙か沖合いの方角。水平線の彼方が、ぽっかりと丸く光っているのだ。

「何だ、あれ……」

混ざり合う波と波の合間、水平線に沿ってプカプカと浮遊するような青白い光の半円。そこだけが、周囲の不吉な嵐の色から切り離されたかのように明るい。

(あそこに、行かなければ)

唐突にそう思った。なぜだろう。どうしてなのかわからないのに、何か大きな手に引き寄せられるように強く、呼ばれている気がした。

「な、何考えてるんだ。それより船だ、船！」

薄茶色の両目をぱち瞬くと、ラタは視線をそこから引き剥がした。いや、引き剥がそうとしたのだ。

が、抵抗空しく、杭でつながれたかのように足が動かない。顔が、体全体が。全力でその光に吸い寄せられてしまっている。生きた柱となったラタの呪縛は、強い突風で一瞬解けた。代わりに足元をすくわれ、倒れる。ちょうどそこに襲ってきた大波が手摺を越えて潜入し、抗う間もなく流された。凄まじい海水の勢いに飲み込まれ、叫ぶこともできず、ラタは暗い海へと沈んでいった。

くすくす、くすくす。

誰かが笑っている。何事かを楽しげに囁きあいながら、遠目に見

守っている。そんな気配があった。さざめき、押し寄せては遠のいていく波のような、はたまた風のような音たちは、ラタが瞼を開いた瞬間に消えうせた。

そこは砂浜だった。細かい白砂のさらさらした感触が、ラタの肌に触れている。アイマスにもらったばかりの腰布が無残に濡れ、半分乾いた状態となって張り付いていた。

(ここは……?)

重い意識の中、自分が海に投げ出されたことを思い出した。いきなりの大嵐。海水に落ちた瞬間、もう死んだと思った。はずだったのに？

瞬きを何度か繰り返し、わかったのは、うつ伏せに倒れていたらしいこと。そして今がもう昏間であるらしいことと、どうやら周囲には他の人間はいないらしいこと、の三つだった。

(おかしいな。誰かの声を聞いた気がしたんだけど)

ゆっくりと体を起こし、砂浜に座り込んだ状態で周囲を見渡してみる。既に日は高く、ラタの後方には濃い緑の木々や白い砂浜が、向かい側には凧いだ海が一面に広がっていた。まるで嵐などなかったかのような澄んだ空には、雲一つない。

「島、かな……？」

おそらく、ネーブ近くの島々のどこかにでも流れ着いたのだろう。にしては どうにも海の色が透き通りすぎている気がするけれど。(こんな綺麗な海……初めてだ)

今までアイマスに付いて行き来してきた東西部や北部の海は、どちらかといえば濃紺。海底までの距離を示す、深い色をしているのが特徴だ。けれど今ラタが見ている色は、それとは似ても似つかぬ薄い青。透明度の高い、限りなく澄んだ遠浅の海。

どれほど見ても、船も人も形すらないことに不可解な思いと恐れを抱きながらも、いつまでも呆けているわけにはいかなかった。それに長時間倒れていたからなのか、ひどく喉が渴いたし空腹も感じた。とりあえず島なら島で、誰か人がいないか、食料や水がない

か探すことが先決だろうと立ち上がった、その瞬間だった。

ころん、と何か足元に転がり落ちた感覚があった。ふと見下ろすと、大きなしずく型をした物体が半分砂に埋もれた格好で止まっている。

「何だこれ……石？」

黒っぽい色をしたそれを拾い上げようと、片手で触れた。途端にぱあっとそこから閃光が生まれた。思わず手を引き、目を瞑る。

もう一度目を開けた時にはまばゆいばかりだった光はおさまっていて、同じ場所には 極彩色の、大きな卵があった。

まるで両手の数だけ絵の具をいっぺんにぶちまけたような、目のちかちかする色合い。縞模様のある、大きな卵だ。彩色してあるのかと拾い上げてみたら、ふわっと 今度は優しい光で 内側から輝いたではないか。

ラタの口は開きっぱなしである。半ば呆然としながら、ああ、そうか、夢を見ているのだ、自分は と無意識に頷いた。けれど、そうっと両手で抱いた卵には重みもあり、人肌に心地のよい温もりまで伝わってくる。

(夢 じゃない……？)

考え直しかけた、その時。

「うわあっ！」

今度こそ叫んだ。拳句、取り落としそうになった。が、なんとか両手の上でソレを支えた。ぽっかりと真ん中から二つに割れた、奇妙な卵と

「あ、赤ん坊……!？」

見たことのない卵から生まれたのは、小さな小さな赤ん坊だった。いや、生まれたと表現していいのかわからないにしろ、出現したことは確かだった。小さいけれど、動物ではなく、人の赤ん坊にそっくりの生き物。それだけでも十分混乱状態のラタを、更なる驚愕が襲う。

「わっ、わっ、わわっ！」

おたおたしながら必死で受け止めたのは、突然両手に余る程度だった卵よりも大きくなってしまった赤ん坊。似ている、というあやふやな印象は今度こそ確信に変わる。それはまさに、人間の赤ん坊でしかなかった。大きさも見た目も全て。

おぎゃあ、おぎゃあ、と泣く裸の赤ん坊はどうやら女の子で、ラタとは異なり、浅黒い肌に、太陽のような黄金色の髪を持っていた。ふわふわの毛は赤ん坊らしく量も少なく、ただ日差しを受けてきらめく。目を閉じ、ひたすらに泣いている赤ん坊を目の前に、ラタは叫んだ。

「何だ、何なんだっ!? こ、これ……どうすれば」

当然ながら、赤ん坊を抱くのは初めて。しかも、一体どういうわけでこんな状態に陥ってしまったのかもわからない。そんな状況下でも、ほにゃほにゃわらかい赤ん坊を砂浜に落とすわけにもいかない。だから、なんとか両腕で抱いた。

くすくす、くすくす。

(まただ!)

笑い声は確かに聞こえてきた。夢かと思って忘れかけていた例の楽しいな囁きも、風に混じって届いてくる。すぐ後ろで誰かが笑っているようにも聞こえるところがおかしなものだが、混乱したラタにはその辺りの判断はできなかった。

「生まれたぞ」「生まれた」「やれめでたい」「それめでたい」

そんな複数の声まで聞こえたから、ラタはぱつと振り向いた。もちろん赤ん坊を抱いたままだからさして大きな動きはできないのだが、精一杯の速さで。しかし、誰もいない。あいかわらず、しいんと静かな砂浜にはラタ一人きり。

「な……何なんだよっ! 誰かいるんだろ? この子……どうしたらいいんだよ!」

そうだ、誰かを探すのだ。思いついた事柄を実行に移すべく、砂を勢いよく踏んで歩く。皮のサンダルは荒波で脱げてしまったのになくなっていたが、裸足でも平気なくらいやわらかく、不思議と冷

たい砂だった。

そうして遠浅の浜から緑の木々が揺れる林まで歩いた時、いきなり視界は開けた。

「わあ……！」

満開の花畑。よく見る赤や白の華やかな海洋花だけではなく、まさに色とりどりの。黄色に紫、青に水色などという変わった色彩の見たこともない形をした花々が太陽の下、一斉に咲き誇っている。ラタが少女であったなら歓声を上げて摘んでいただろう花の大群は、なぜだか一本の小道の部分だけには侵入していなかった。

白砂の、整備されたような細い道を進むうちに、いつしか赤ん坊が泣き止んだことに気づく。見下ろすと、すうすうと穏やかな寝息を立てていた。ほっとしつつ先を行くと、突き当たりにあずまやと噴水。くすくす、くすくす　笑い声は、その辺りから聞こえてくるようだった。

「だっ、誰か……いるんです、か？」

声が小さくなったのは、あまりに美しい光景が空恐ろしくなったからだだった。それに、この手の中にいる赤ん坊は、確かに卵から生まれたのだ。自分の頭がおかしくなったのか、そうでなければ海に落ちて死んでしまった自分が死後の国へ来てしまった、なんていう可能性も。

「来たよ来たよ」「ラタの子孫が来たよ」「我らの愛し子が」「守り育てる者が」

重なり合う声は、童女のものに思えた。誰だか知らないが、今度こそ姿を見てやる　そう意気込んで振り返ったラタが見たのは、何羽もの鳥だった。

大きな黄色の嘴に、先ほどの卵と似た極彩色の全身。同じ色の羽で全身を覆われたものもあれば、一枚一枚に違う色を持つものまで十羽ほどの鳥たちが、一斉に翼を動かし、空中に浮遊していたのだ。幻聴かと思うも、開かれた嘴の奥からまた声が聞こえた。

「ティンガは神殿に」「ティンガは神殿に」「太陽神様がお待ちか

ね」

「ティンガ……？ 太陽神……？ あつ、ちよつと待って！」

姦しく言い残した鳥たちは、再び羽ばたき、前方に飛んでいく。もしかして案内してくれているのだろうか、と追いかける。

花畑とあずまや、噴水を通り越し、いつしか道は広々とした石畳に変わった。大きな都で見るような作りだ。もしかしたらここは島ではなく、ネーブのどこかかもしれないとも思ったが、やはり何かおかしかった。

海風が吹き込む石畳の通りは、両脇にオリーブやマンゴーの木々が揺れている。エル椰子の実が鈴なりになった木まであって、ラタの頭に一つの文章が浮かんだ。

（さいはての島……色鮮やかな花々に、瑞々しい果物……まさか）
そんなはずは、と否定しながらも、鳥を追う。

たどり着いた先で、荘厳な門が開く。門番も誰もいないのにゆっくりと、ラタを迎えるように。青い空と海に映える白亜の御殿が、なだらかな丘の上にそびえ立っていた。腕の中で眠る赤ん坊と御殿とを見比べ、ごくりと喉を鳴らしながら、ラタはゆっくりと丘を登っていった。

「おお、来たか来たか……待っていたぞ、我らがファルマよ。よう来た」

御殿、というより宮殿を思わせる広い建物。全てが荘厳で美しく、立派な円柱が多用された造りである。誰もいない入り口から大広間らしき場所へ入ったラタは、足を止めた。中央にあつらえられた天蓋付きの豪華な寝台から、声が聞こえたからだった。

確かに人間の声だ。何かよくわからない単語が聞こえたけれど、そんなことに構っている場合ではない。

「ああよかった……人がいた！ あの、すみませんがこの赤ん坊を……」

言いかけたラタは、垂れ下がる薄布を片手で開き、寝台から滑り

出る人影を見た。それはラタが今までに見たこともないほどの、美しい女性だった。

「太陽神様」「太陽神ゼーダ様」「お目覚め」「お目覚め」

いつの間にかやってきたのか先ほどの鳥たちが、立ち上がった彼女にまわりつくように飛び交う。足先まで流れる金の滝のような髪。しっとり潤いを感じさせる浅黒い肌。完璧な彫刻を思わせる美貌。純白の布を巻きつけたような長衣も、その出で立ちも、何もかもラタの知る人々とは違っている。

「おおこれこれ、よしよし」などと親しげに鳥たちの頭を撫で、細めた瞳の色。太陽の光を集めたような黄金色の、不思議な色彩である。が、優しくラタを映した。

「そなたが今度のファルマか。うむ……その名にふさわしい、愛らしい少年であることよ。今までの中で、一番『ラタ』に似ておるの」
懐かしや。そう、噛み締めるように呟く女性は、ラタの腕にいる赤ん坊に目をやった。一、二度、満足げに頷く。

「瞬ったのだね。このゼーダの血を受け継ぐ、愛らしい赤ん坊じゃ。しっかり守り、育てておくれ、ファルマのラタよ」

流れるような仕草で頭に手を置かれて初めて、ラタは自分が呆然と見惚れてしまっていたことに気づいた。見惚れる、というよりも、魂を抜かれるかのような圧倒的美貌と存在感だ。こんな存在の前で平気でおれる人間がいるわけが。人間？

「あ、あのちよつと待って……太陽神、とかつて今……それに、ファルマって？ この赤ん坊は何なんです？」

困惑のまま、置いていかれてもしたら余計に困ると、勇気を振り絞って呼び止めた。頭に触れられた瞬間、とても優しい気持ちがあったことも、妙な懐かしさが全身を包んだことも、とりあえずは後回しだ。

「阿呆」「阿呆」「歴代で一番飲み込みが悪い」「こいつは阿呆」

鳥たちが一斉に鳴き、わめく。喋るだけでも不思議なのに、言葉は明瞭で、しかも毒舌ときている。驚愕と困惑に眉を寄せるラタを

見て、女性が笑ってたしなめた。

「これこれ、仮にもファルマに向かって何という口の利きよう。神の使いが聞いて呆れるぞ？」

「神の……使い？」

ぼんやりと繰り返したラタに、彼女は頷く。揺らめく金の水面のよくな双眸が、微笑みの形に和らいだ。

「ここは神々の住まう島、ティンガタンガ。我は太陽神、ゼーダと呼ばれる者。そしてこやつらは神の使い、極楽鳥どもよ。お喋りが好きで煩すぎるのがたまに傷ではあるが、根はよい奴らじゃ」

「ティンガ、タンガ」

そんな馬鹿な。そう思う自分と相對しながらも、どこかで渦巻いていた問いと答えがかちあう。美しい島、美しい自然、そして美しい神……ならばこの赤ん坊は。

「そなたは、百年に一度生まれる神の子に選ばれし者、ファルマの役割を負っている。それはラタの血を引き、力を受け継ぐ存在である限り、いにしえからの約束事じゃ。どうか、そこに生まれし神の子ティンガを可愛がり、立派な神に育てておくれ。ファルマ　慈しみ深き乳母よ」

「う……乳母……乳母っ!？」

絶句したラタの腕の中でむずがりだした赤ん坊が、うんぎゃ、と大きく泣いた。

「起きろ」「起きろ」「阿呆」「阿呆」

両耳に、けたたましい声がなだれ込んだ。目を開けたラタは、自分が大きな御殿　本当は神殿であったのだが　の一室、大きく海側に向かつて開いた窓辺の長椅子でうたた寝していたことを知った。そしてすぐに、ぱっと起き上がった。見慣れない人影が二つ、自分を見つめている。

「きつ、君たちは誰っ？　あ、あの赤ん坊は」

はっと辺りを見回して、自分のすぐそば、籐で編んだ揺りかごに

気づく。中にはやわらかそうな布が敷かれ、純白のおくるみに包まれた赤ん坊が眠っている。無意識に、ほうと息を吐いた。

（よかった……無事だ。って、なんで僕がそんなこと気にしなきゃいけないんだ）

ラタの思考を読んだかのように声を立てて笑ったのは、目の前にいた双子の少女の片割れだった。

「目覚めてすぐにテイニングの安否を気遣うとは、一応ファルマらしい行動。合格、合格」

「ぎりぎり合格、ぎりぎり合格」

高い鈴の音にも似た、少女たちの声。先に喋ったのは薄紅色の髪を二つに結わえたほうで、次に頷いたのは薄緑色の髪を後ろで一つに縛ったほうだ。どちらもが浅黒い肌に、髪と同じ瞳の色をしている。派手な極彩色の、太い糸で織り上げた上下別の衣服。短い上衣、短い下衣。ちょうど真ん中におへそが覗いている。

自分と似た年頃に見える少女たちの無防備な格好につい目を逸らしかけ、布のあちらこちらで揺れる鳥の羽根に気づいた。色鮮やかなそれは、確かに先ほど目にした。

「きつ、君たち……まさか」

「今頃気づいたか。鈍感、鈍感」

「阿呆、阿呆」

二人揃ってあきれたように言い放つ。どこか一本調子な声音は、やはりあの鳥たちのものと同じだった。

（そ、そんな　鳥が人間になるなんて）

驚くラタだが、鳥が喋る時点でおかしいのだし、そもそもこの鳥では奇妙なことばかり起こっている。

「まあ……リネにルネ。 magari なりにもお世話役を仰せつかった者たちがそれでは、ファルマがお困りですよ？」

静かな声が割って入る。入り口の薄布を片手で分け、歩いてくるのも、浅黒い肌の美女。こちらは二十代半ばほどに見えるが、しつとりと長い黒髪と落ち着いた仕草で、穏やかな印象だ。優美な肢体

に、そのまま純白の布地を巻きつけたような服を着ている。

「だってサアラ、阿呆は阿呆だもの」

「そうそう。仕方ない、仕方ない」

何でも二回ずつ言うのが彼女　鳥、が変化した姿とは未だに信じ難いが　たちの癖らしかった。きゃあきゃあと楽しげな笑い声を上げ、二人で頷きあっている。

「ごめんなさいね、ファルマ。本当は優しくていい子たちなのですけれど、久しぶりのお客様に興奮してしまっているんですの」

「は、はあ……」

頬に片手を当て、困ったように微笑む女性　サアラに、ラタも曖昧に笑い返した。内心、やっと話の通じそうな人が来た、とほっとした思いだったのだ。

「わたくしはオリーブの女神、サアラと呼ばれております。歴代のファルマの補佐役を務めておりますので、どうぞよろしくお願いを

……」

「め、女神？　人間じゃ……」

「まあ。この島には人間はおりませんわ。たった一人、ファルマであるあなた様を除いては誰も。だって神々の島、ティンガタンガですもの」

にっこり。無邪気な微笑で言い切られてしまうと、沈黙するしかなくなつた。自らを太陽神だと名乗る美しい女性。喋る鳥。不可思議な嵐。全ては一つの答えにつながっていく。先ほどゼーダ本人に肯定され、説明された結論に。

何が何やらわからぬまに奥の部屋へ通され、待たされる間に眠ってしまった。極度の疲労のせいだったのだらう。それで余計頭はぼんやりして、夢の中にまだいる気分だった。が、

(ティンガ、タンガ　そんな……本当に?)

実在するはずなどないと信じていたさいはての島。まさか自分がそんなところに流れ着いたなんて、一体誰が信じよう。

「流れ着いたのではありませんわ。卵が　ティンガが呼び寄せら

れたのです」

「えっ……ええっ！？　で、でも、僕はネーブに向かっていたはずで……そんな南洋の果てとは距離が違いすぎて……」

「あら、距離など問題にはなりません。同じ海ならば、ティンガにとつて引き寄せることなど造作もありませんわ。だって」

「だ、だって？」

「だって神の子ですもの」

にっこり。あくまでも穏やかに、淑やかに。当然のように言われ
てしまつては、ぐうの音も出ない。

大口を開けて固まつているラタは、どうぞ、と長椅子に腰かける
ことを勧められる。おずおず座つたラタとサアラの周りを、リネと
ルネが騒がしく駆け回つた。

「リネ、ルネ、静かになさいな。どうやら今度のファルマは本当に
何もご存知ではないようです。しっかりご説明してさしあげなけれ
ば」

「阿呆、阿呆」「やっぱり阿呆」

「これ！　いいかげんになさい！」

叱られてもしゅんとするどころか、リネとルネは一瞬で鳥に変化
してしまつた。バタバタと開け放たれた窓から外へ。逃げたのだろ
うか。とかく、自由奔放な鳥たちらしい。

（やっぱり……鳥だったんだ。そして、神の使い）

目の前で見せられて、信じないわけにはいかなくなる。何やらとて
つもなく大きな、偉大な事象に、自分が巻き込まれ始めていること
をようやく感じていた。小さく咳払いをしたサアラが、そんなラタ
に向き直る。

「ティンガタンガ　それは神々に残された、最後の楽園。ティン
ガは神の子を、タンガは翼を……古き言葉で、そうやって名付けら
れた島です」

ティンガという言葉は、百年に一度生まれる神の子だけでなく、
その子の宿つた卵自体をも指すのだという。生まれた卵、ティンガ

は既に自分のファルマ　乳母がどこにいるかを知っている。だから、自然とその人間が近くにやってくるように仕向け、呼び寄せるのだ。そしてファルマと出会えた卵は、母なる島で孵化する。

サアラの話す言葉は全て、どこか絵空事のようなようだった。それなのに、すうつと心に染み入ってくるのは、サアラの声のせいだろうか。優しく、じんわりとした温かさを相手に与える語り方。それはまるで、親が子に語り聞かせる物語にも似ている。

記憶の奥底に深く沈んだ光景を垣間見たような　説明の付かない懐かしさが、なぜだかあふれてくる。

(ど、どうして……両親のことなんて、覚えてもないのに)
一瞬頷いてしまいそうになるのを意思の力で否定し、ラタは首を振った。

「そんな話……すぐには信じられません」

「まあ。でも現にあなたはこうしてティンガタンガにいる。そしてもう、神の子ティンガをその腕に抱いたではありませんか」

「で、でも」
唇を噛んだ瞬間、小さな　それでいて、しっかりと存在感を主張する泣き声が響き渡った。ほぎゃあ、ほぎゃあと、自分と呼ぶ声
が。

「ほら、ティンガが泣いています。抱いてさしあげてくださいな」
優しく促すサアラ。泣き続ける赤ん坊。静かな部屋にそよぐ潮風の香りと、遠い波の音。そのどれもが自分の日常とは違いすぎて、現実感がなくなる。親方にどやされ、荷を運び、市を駆けずり回り、船の掃除をする　そんな奴隷の子、ラタとしての日々が遠ざかる。

(親方……そうだ、船は？　きっとみんな、心配している)
思うのに、なぜか胸の奥底から強烈な欲求があふれ、自分自身を
圧倒した。

呼んでる。

(なんで僕が乳母なんか)

あの子には、僕が必要なんだ。

(嫌だ、そんな訳のわからない役目)

それでも、僕にしかできないことだ。

(でも……！)

内面で二つに分かれ、葛藤を繰り返すラタ。なのに、気づけば揺りかこのすぐそばまで歩み寄っていた。そうつと、おそろおそろ覗き込んだ先には、小さな手足をじたばたさせながら、真つ赤な顔で泣いている赤ん坊がいた。

(僕は……)

ファルマ。

それは例えて言えば、体中を流れる血潮に刻み込まれたような概念だった。命令にも似た強い記憶。脈々と、いにしえの時より受け継がれし役割。心が拒否するよりも前に、体が腕が、素直に動いていた。泣きわめく赤ん坊を抱き上げ、愛しむように胸元に引き寄せる。刹那、ぴたりと泣き声が止まった。見下ろすと、天使のような満面の笑みが。

(可愛い……！)

堰を切るようにあふれた思いは、ラタ本人にも止められないものだった。さつき最初に抱いた時には何も感じなかったのに、どうしてなのか。とてつもなく愛しい宝物に、ようやくめぐり合えた気さえした。

「ティンガとの契約が成立したようですね。よかったです……！」

「契約……？」

ええ、とサアラが嬉しそうに続ける。

「一に、ファルマの心が開かれていること。二に、ティンガが聖なる太陽神殿の内にあり、心からファルマを求めていること。それが、ティンガとファルマとの契約成立条件です。そして契約が整えば、両者は片時も離れることなく、共にあることを定められる。いいえ

定められずともそうせずにはおれぬほどの、愛情があふれてくるはずですね。ともかく、これでこの一年、この子が立派な神として成体になるまでの日々を、乳母として誠心誠意お世話いただくこ

とが決まったわけです」

「お世話って……一年って、そんなこと、勝手に」

あまりの展開に、抗議しかけたラタの声が中途半端に止まる。腕の中でご機嫌にしていた赤ん坊がぐずりだしたのだ。えぐえぐ、と今にも泣き出しそうに唇と額をゆがめている。

「あああ、大丈夫だよよよしよし」

「ほら、やっぱり」

あわてて抱き直し、機嫌を取るように笑った。ラタのそんな態度に、サアラは満足げである。愕然としながら、ラタは赤面した。

（な、なんで……？）

自分でも無意識のうちに、赤ん坊が泣くのは嫌だと感じる。何とんでも笑わせてあげたい。健やかで、幸せであってほしい。そんな願いが胸に満ちていく。

（これが、ファルマの血だっていうのか……！？）

嘘だ。嫌だ。なんで 思うのと裏腹に、ほっとしたように静かになった赤ん坊を抱きながら、嬉しくなるのだ。

「百年の間にまた一段と人々に忘れ去られてしまったようで心配しましたけれど、どうやら大丈夫そうですね」

背後で呟くサアラの言葉も、言われていることも、全て耳を素通りしていく。ラタの瞳は、赤ん坊のぱっちりとした二重眼に釘付けだった。

太陽を溶かしたような黄金色。まだ短い髪とは対照的なほど、はつきり色合いのわかる瞳。それは人が持ちえぬ色彩。まさに、あのゼーダと同じものだった。

（太陽神の子……本当だったんだ！）

「神と人はいつも共にあり、互いの心に寄り添っている。それゆえに、生まれ出でた時より一年は、神も人と同じ歩みをたどるものなり」

「え？」

「今はこんな話を後世に伝える語り部たちも少なくなっただけでしょ

うか？ あなたの場合は両親を早くに亡くしたようだから、余計に伝わらなかつたのですね。つまりは神の子、ティンガの育つ様子を指して言っている言葉なのです」

「人と同じ……えっと、人間みたいに育つてこと？」

ラタの遠慮がちな問いかけを、サアラが笑みで肯定する。熟したオリーブを思わせる濡れた黒い髪が、潮風に優しくなびいた。

「ですから、生まれ出でるのは卵からであつても、人の子と同じように泣き、食し、排泄し、眠る、ということですよわね」

「は、排泄」

「といつても神の子ですから、汚いものではないのですよ？ ただ形として、という意味です。それからティンガの食するものはファル。それを与えられる『母』という意味がそのままファルマの語源です。もう少し大きくなれば人と同じ食物を摂取し、段階は多少飛び越してはいても、同じように成長してゆきます」

「段階を、つて……成長が早いつてことなのかな」

「ええ。一年で成体 そのティンガにとって、最も良いと思われる状態まで年を重ねるとそこで止まりますが。それまで、人で言うところの一歳程度をひと月で、一年で十二歳分の成長をすることになりますね。そこから成体になる時、どれほどの年齢に見える姿になるかはそのティンガによって違います」

色々一気に説明されて、ラタは両目をぱちくりさせる。腕には赤ん坊を抱いたままで、その反応に目を奪われながらの話だから、余計に飲み込みにくかつた。

「えーっと……でも神様つて不死の命を持っているつて。成体、とかいふのになつたら、あとは永遠に生きているつてことなのかな」
「厳密に申し上げれば不死、ではありませんけれど、まあ人と比べるとかなり長生きすることだけは確かですよわね」

「それつて、その……サアラさんもつてこと？」

「あら、神と言えども女性。年を訊ねるのはご法度ですよ、ファルマ」

うふふ、とごまかすように笑われて、困惑する。

「あ、あの、その『ファルマ』って呼び名は」

「お嫌いですか？ ならば、ラタ様で」

いつのまにか名前まで知られているし、よく考えればさらっとラタの身の上まで言つてのけた。この状況で信じないほうが無理なのかもしれない。それでも心の中であがいていたラタに、サアラはあつさり付け加えた。

「親方のアイマス様や船のことをご心配しておいでなら、無事ですわ。あなたのことをお教えするわけにはいきませんが……夢枕で無事を知らせる程度のことならば、ゼーダ様も許可されますでしょう。僭越ではありませんが、奴隷として売られることを思えば、神の島でこの子のお世話をするほうがよっぽど有意義な過ごし方ではございませんか？」

放心状態。というか、いきなり人生の荒波から夢の花園へ放り込まれたような混乱。それなりの覚悟を決め、これから男として立派に生きていくのだと信じて疑わなかった自分に、神様の『乳母』をしろというのだ。喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか、それとも怒るべきなのかもわからない。何もわからない中、また赤ん坊がぐずり出した。

「今度こそお腹がすいたのかもしれないわ。ラタ様、さ、ファルマを差し上げてくださいませ」

「え、ファルマって」

何、と訊ねるまでもなく、ふわ、とやわらかいものがラタの頬に触れた。呆然とするラタから離れたサアラは、悪びれることもなく微笑む。

「今のがファルマです。あくまでわたくしがやってみせたのは形にし過ぎませんが、ファルマがテイంగాに対して行えば、そこにファルマしか込められない無限の愛情が加わります。それが神の子を育てる唯一の栄養、ファルマとなるのです。人間の赤子が飲む、お乳のようなものですわね」

淡々と言つてのけたサアラの、瑞々しい果実のような唇。それが頬に触れたやわらかさの正体なのだとうやく気づいたラタは、顔を真っ赤にした。

「すけべ」「すけべ」「ファルマはすけべ」「役目失格」「お役目御免」

いつのまに舞い戻ってきたのか、極彩色の鳥たちが部屋の上で飛び交っている。

「まあ、リネにルネ。それにターサにベーサまで。純情な人の子をからかつてはいけませんよ？ えっと、何でしたかしら。そうそう、ファル。本当は唇と唇で行うのが一番なのですが、ラタ様がやりやすい場所で大丈夫です。頬や額、鼻の頭……どこでもいいので、深い愛情を込めて口づけをしてさしあげて下さいませ。さ、お早く」「くっ、口づけ……」

「すけべ」「すけべ」「やっぱりすけべ」「ファルマはすけべ」

鳥から人間の、少女の姿になった神の使いたちが、ラタの周りをぐるぐる回っている。踊りながら、はやしたてては笑い合う。けたたましいことこの上ない状況である。

赤ん坊はどんどん不機嫌になり、泣き喚く。もはや、やけくそだった。

「や、やればいいんだろう！ やれば！ 口づけくらいなんだよっ」
しかも赤ん坊にだ。そんなこと、言われなくなつてやってやる。

真っ赤になつて、よもや初めての口づけというものを神の子相手にしようとは思ひもよらなかつたにしろ　ラタは勢いのまま、赤ん坊の頬に唇を押し付けた。腹立ちまぎれにやっつたつもりが、触れた瞬間押し寄せるような愛しさが込み上げてくる。

(可愛い……！)

間近で見るぱちくりした両の眼。ちょこんとした鼻。小さい口。

やわらかい頬。すべすべした浅黒い肌に唇を付けながら、ラタは自分自身からあふれる感情をそのまま注ぎ込むように、優しく抱きしめた。

それが大昔から義務付けられた役目のせいだとか、もうそんなことはどうでもよかった。ただただ腕の中にいる赤ん坊が愛しくて、この小さな存在を守ってやりたくて、そのためなら何だってしていいとまで思えてくる。

そして長く思えた一瞬が過ぎた時、唇を離れたラタの耳に、盛大な拍手の音が聞こえてきた。

「おめでとう！」「いやーめでたい！」「俺にも」「あたしにも」「祝福させて！」と重なり合った幾つもの声の持ち主は、なんと姦しい鳥たちではなかった。様々な色の髪に瞳を持つ背格好もばらばらな人物たちが、口々に祝いの言葉を言いながら拍手しているのだった。

「なっ、何なんですかこの人たちはっ」

「あら、ラタ様ったら。先ほども申し上げた通り、ここには『人』っ子一人いませんわ」

「ってことはみんな……」

「神だ」「神」「神様全員集合だ」「祝宴だ」「祝宴」「酒、酒！」「極楽鳥たちが甲高く囀りあう。その周りで、人 もとい、神様たちが踊りだす。あるいは歌い出す。それはそれは賑やかな光景。にも関わらず、念願の『ファル』をもらったからか、小さい口でふにやふにや何事かを満足げに唸っていた赤ん坊は、また眠たげに目をこすっている。瞳の色も若干濃く、何よりも黄金の髪が、先ほどよりわずかに伸びている気がした。

（成長……本当に？）

自分の、たった一回の口づけがそんな力を持つんだらうか。奴隷の子の自分が 本来ならば、どこの誰とも知らぬ金持ち相手に売られ、働かされていたはずの自分がこうして誰かの役に立てるのならば。

（やってみても いいのかな）

ラタの心に、ほわんと暖かな火が灯った。それはアイマスに頭を撫でられる時にも、記憶のない母や父を想う時にも似た、安らかな

火だった。

「やつてもいいと……思っておくれかい？ ファルマのラタよ」

声は、太陽神ゼーダのものであった。顔を上げたラタと腕の中の赤ん坊を、慈悲深い眼差しで見つめている。幾多の神々が、鳥が、サアラが 皆、自分に注目している。

注目は鍵となり、ラタの心の扉を開く。血潮に刻まれた欲求を呼び起こす。水瓶にたまった水があふれ、流れ落ちるかのよう。心に芽生えた想いに引つ張られ、いつしかラタはするりと頷いていた。高まっていた緊張が、急激に凪いでいく。自覚してしまえば、何とすることは無い。確かにラタの天秤は、大きく一方向に傾いていたのだ。気持ちを固め、声にする。

「はい……こんな僕で、いいのなら」

につこりと、満足そうにゼーダは笑みを浮かべる。鳥も神も誰も彼もが、一気に歓声を上げた。

「祝杯だ」「祝杯」「ティンガとファルマの約束事が果たされた」
「祝い酒」「酒だ」

もう誰が喋っているのかもわからないくらいに騒がしい。自分の決断がこれほどに喜ばれたことなど、今までにないことで。ラタは赤ん坊を抱き、もじもじしながらゼーダを見上げた。

「ん？ 何か聞きたいことでもおありかい？ このゼーダが何でも答えてやるっ」

上機嫌に訊ねられ、それならばと口を開く。思い浮かんだ単純な疑問の答えが知りたかったのだ。

「あの……恐れながら、太陽神様」

「ゼーダで結構」

「で、では ゼーダ様」

「うん？」

「神の子ティンガをファルマが育てる。それは……ええと、一応理解はしました。まだ信じ難い気分は抜けませんが、でも……」

「でも？」とサアラも小首を傾げる。神々までも何やら楽しげに見

守っている。

勇気を振り絞って、ラタは続けた。

「どうしてゼーダ様がお自身でお育てにならないのですか？ ご自分でお産みになった卵が　ティンガが、愛しくはないのでしょうか？」

問いを終えた瞬間、部屋の中が水を打ったように静まり返った。ゼーダの、なだらかな弧を描く眉がぴくりと上がる。

（ぼ、僕……何か変なこと言ったかな）

失態、という単語が思い浮かぶ頃。何事もなかったかのような微笑を見せ、ゼーダは堂々と答えた。

「そんなもの……面倒だからに決まっておろう？」

「は？」

つい、率直な反応をしてしまった。それでもゼーダは余裕の表情を崩すことはない。磨き上げられた大理石の床にまで流れ落ちる金の髪を、鬱陶しそうにはらう。

「神といえば、やれ慈愛だ慈悲だ全ての者の聖母だ何だ……人間というものは、大きな思い違いをしておる。神とは本来、自由にして奔放なる者。愛を与えもすれば、容赦なく奪いもするものなのだ。

要するに　子を育てる、などという七面倒くさい所業は、この太陽神ゼーダの好むものではない」

「そうそう。神ってのは、楽しく遊んで暮らすものなんだよ」

「うんうん。長い命、楽しまなきゃ損だよねー」

「自由」「自由」「奔放」「奔放」

あちらこちらで神の誰かが同意し、鳥たちは声を揃える。サアラでさえも、その独特の泰然とした微笑みを湛え、頷いている始末。

（僕……とんでもないところに来てしまったのかもしれない）

さいはての神の島、ティンガタンガ。人に許されぬ奇跡の地に呼び寄せられ、神の子を育てる乳母になった。それが自身の運命をも大きく変えることになるなんて　まだこの時のラタには、予期す

らできぬことだった。

青い青い空と海は、今日もティンガタンの平和を見守っている。

二話 はじめの花

ラタに乳母として課された最初の『儀式』は、赤ん坊の名付けだった。それは神の島ティンガタンガに流れ着き、もとい、半ば強引に連れて来られた翌朝、朝食の席で補佐役サアラに教えてもらった予定である。

「え……僕がこの子に名前を？」

いきなりの洗礼　二、三時間に一度の割合で赤ん坊の泣き声に起こされ、その度にファルを与える。つまりは口づけしっぱなし、という一晚を終える明け方には眠気に負け、赤ん坊を腕枕で抱き、その頬に唇を付けたまま寝台に沈んでいた。（ちなみに、その頃には口づけに対する気恥ずかしさも何も吹っ飛んでしまっていて、眠れるものなら延々その体勢でも構わないとさえ思っていた）

そんなわけだから、寝不足のラタには余計、寝耳に水であった。

「ええ。神の子ティンガに愛を込め、代々の乳母が名づけを行うことに決まっていますわ」

「それはやっぱり、母である太陽神ゼーダ様が行うというわけには……」

面倒だからに決まっておろう？

昨日、衆目の場でゼーダが言い放った言葉が脳裏に蘇る。きつと今ここに彼女がいたとしても同じことを言われるのだろう、と悟ったラタはひそかに嘆息した。ちょうどその時、籐の揺りがごに寝かせておいた赤ん坊がぐずりだす。

「あーはいはい。ファルね。あ、違つか。おむつが濡れてる」

白い下着を解き、お尻にあてた布を取り替える。奴隷商アイマスの船で、下働きも兼ねて様々な雑用をこなしてきた。そんな日々で、子守めいた仕事をしたこともある。が、さすがにおむつを必要とする赤子までは世話したことがなく、これも昨日から何度も繰り返した拳句に習得した技術だった。

用意された清潔なおむつをあててやると、気持ちがいいからか赤ん坊はニコニコしている。ちなみに、汚れたほうはまとめて籠に入れてあった。といっても神の子ティンガの排泄物は汚いわけではなく、無色無臭の尿と、ちょうど蜂蜜みたいな形状の、甘い香りまでする便（一応、こっちは呼ばざるを得ない）である。最初は戸惑ったが、湯水でお尻を洗い、布で拭いてやることにもすぐ慣れた。ぷりんと丸いお尻が可愛らしくて、揺りかごを覗き込みながらつん、と人差し指で突付く。きゃっきゃと笑う赤ん坊。その姿はたったの一日でかなり成長している。生まれたて、という雰囲気ではなくなり、黄金色の髪も頭全体に生え揃い、瞳はますますぱっちりと開かれて、愛らしい赤ん坊そのものだ。呼ぶように両手を伸ばされては、抱き上げないわけにいかず。更に「んーん」と喃語なんごながらに求められてはファルを与えたくなくなるというもので、氣づけば、両頬に口づけていた。

寝不足の恨みもあつという間に晴れてしまうほどの至福。不思議だけれど、これもファルマとして、神々のお気に入り『ラタ』の子孫である所以。乳母として選ばれた以上仕方のない運命なのだとわりきってしまうことにした。

よくよく考えると自分は、奴隷としての日々でもそう考えていた気がする。第一、そんな境遇に置かれた人間はラタだけではなく、大陸全土に無数にいるのだ。物心付いた時からそうだったのだから、疑問を抱く暇もなかった。

目の前の仕事を無心でこなすこと。いちいち自身の不遇を嘆くより、淡々と生きていくこと。そんなやり方が性に合っていた。だから脱走も企てず、アイマスに気にいられもしたのだろう。

（奴隷よりは乳母のほうが、まだましなのは確かだし）

サアラに言われた通り、自分は幸運だったのかもしれない。ちゃっかりと同意して、ラタは一人口元を緩めた。そのまま、輝く太陽を思わせる双眸と視線をからませる。浅黒い色をした小さな手が、差し出したラタの指をぎゅうつと握った。

「うふふ……もうティンガにぞつこんのようですわね、ラタ様は」
すぐそばにいるサアラのことを忘れていた。頬を染め、顔を上げるラタ。

（確かに　このまま、『赤ん坊』とか『この子』とか呼ぶわけにもいかないし）

可愛らしい外見に似合う名前は必須だろう。ただ、そんな大役を自分が担わなくてはならないことに気後れしてしまうだけで。

「ティンガ、というのは、ただ『人間』とだけ呼んでいるのと同じようなもの。あなたにも『ラタ』という素晴らしい名前があるように、ぜひ素敵な名前を付けて差し上げて下さいませ」

「は、はあ……」

（でも……名前ってどんな？）

いきなり言われても、全く思い浮かぶ候補も何も無い。頭を捻りながら困っている、開け放たれた窓から勢いよく飛び込んできたものがあつた。

「朝」「朝」「阿呆はどうだ」「阿呆は持ちこたえたか」

けたたましい鳴き声　いや、話し声と呼ぶべきか。ともかく、両側から甲高い声でがなりたてたのは、神の使い極楽鳥たち。十羽ほどいる中で、一応ラタの世話係を言いつけられたらしい（のに全く役目を全うしていない）二羽、リネとルネだった。

「あ、阿呆って呼ぶのやめてくれないかな。僕にはラタってちゃんと名前が」

「神話も知らぬ間抜けな子孫は、阿呆で十分」

「そうそう、阿呆で十分」

薄紅色の髪と瞳をしたリネが言うと、薄緑色の髪と瞳のルネが笑う。そう、あつという間に鳥から少女の姿へ変貌した彼らは更に無敵。ケタケタと笑い合いながら、ラタの周りを踊りまわる始末だ。

「これ、リネにルネ。おやめなさ……」

「知らないなら、教えてやればいい」

突如部屋の入り口から聞こえた声は、楽しげな笑みを含んだ低音

だった。騒々しいリネたちに辟易としていたラタに近づいてきたのは、背の高い青年。これもおそらくは神なのだろう。濃い紫色の髪はゆるゆると波打ち、肩の辺りで丸まっている。言うまでもなく、肌は浅黒い。それがティンガタンガに住む神たちの特徴であるらしい。

ラタの予想通り青年は口を開くと、

「私は葡萄の神、セイズ。僭越ながら、年若きファルマの手助けになるのらと思ひ、こうして参上した次第」

「自慢屋セイズ」「自惚れセイズ」「出た出た」「来た来た」

ちよつと嫌そうな顔を見合わせて、リネとルネが互いに囁く。といても元々声を通る彼女たちだから、ラタにまで筒抜けだった。サアラがセイズに会釈する。

「まあセイズ。あなたのような博識な方がお手伝い下されば、ラタ様にもとても有益なことでしょう。それで、知らぬなら教えて差し上げれば、というのは？」

「美しいサアラ。ご機嫌麗しゅう……私がラタ殿をお助けすることで、あなたの重荷を少しでも背負えるのならはこのセイズ、喜んで火の中の中……」

大げさな身振り手振りで演説でもするように話すセイズ。しかし、慣れた様子のサアラは微笑みで一蹴し、本題に戻した。

「神話を知らないのは今の時代、ラタ様だけではございませんわ。神であるわたくしたちと人々が近かったのは遙か昔のことですもの。それでセイズ、何か妙案でも？」

「ああ……ラタ殿はまだ島に来たばかり。まずは案内も兼ねて散策しながら、島と人との物語を話してさしあげようかと思つてね」

「まあ島の案内を！ それは確かに素敵なお考えかもしれませんわね。補佐役でありながら、わたくしそんなことまで考えませんで

」

別にそこまで立派な案とも思えなかつたけれど、サアラはとつてつけたように褒め称えた。もしかしたらそれが、この葡萄の神への

最適な対処法なのかもしれない。

「ではリネとルネ、あなたたちも同行してちょうだい。わたくしはティンガを見ているから」

「えっ？　で、でも離れて大丈夫なんですか？」

「ファルは先ほど与えられたみたいですし、またしばらくは眠られるでしょう。そのぐらいの間ならば、ティンガのご機嫌も損なわなはず。お気遣いなく行っておいでなさいませ」

「は、はい……」

言われてみれば、確かに一年もの間ここで過ごそうと言うのだ。

島について知っておく必要はあるし、何より純粋な興味もあった。それにしても。

（もうティンガを置いていくのが不安な気がするなんて、不思議だ）
一晩を共に過ごしただけに、情が芽生えたのか。それとも、これもファルマとしての血のなせる技なのか。

「今の内」「今の内」「いつ音を上げるのか楽しみだ」「楽しみ楽しみ」

リネとルネが、声を揃える。まるでラタの心を読んだかのような言葉にどきつとした。照れ隠しに言い返したくなるが、彼女たちが使用済みおむつの入った籠を持ち上げるのを見て、ラタは黙った。
（そうか。世話係はやる気がなくても、洗濯なんかはしてくれるんだ）

と思つたのも束の間、
「行く前に洗ってけ」「洗え洗え」「ティンガのお世話はファルマの仕事」「阿呆でもファルマ、お前はファルマ」

籠を押し付け、さっさと鳥に戻って飛んでいく二人　もとい、二羽。啞然としたラタに気の毒そうな顔は見せつつも、サアラは特に口出ししなかった。

「そうだね。汚れ物の洗濯も立派なファルマのお役目。他者が手を出すべきではない仕事だ。私なら終わるまでのんびり歌でもうたつて待っているから、気にしないでくれたまえ」

セイズにまで頷かれ、ラタは引きつりながら笑った。笑うしかなかった、というべきか。船員たちの洗濯などで慣れているし、今更これほどの量で困ることはない。可愛いティンガのためなら、やってやるうじゃないか。

既に親鳥のような気分で、揺りかごに眠る赤ん坊を見やる。先ほどリネたちにからかわれた言葉が頭に留まっではいたが、それほど辛いことには思えなかった。

（奴隷としてずっととき使われて生きていくことを思えば、これくらいのこと）

平気だ。むしろ、ティンガの成長が楽しみにもなっってきている。やはり自分は、案外順応しやすい性格なのかもしれない。案内された洗濯場でおむつを洗いながら、それでもラタはまだ楽天的な気持ちでいたのだ。これから待ち受けている困難の数々など、予想だにできずに。

ティンガタンガ、さいはての神の鳥。それはどこに。いつもここに。それは青い青い海の果て。青い青い空の果て。澄んだ心の奥にある。澄んだ瞳の中にある。

葡萄の神セイズは、本当に歌いながら待っていた。十枚以上のおむつを丁寧に洗い、気持ちのいい青空と海風に託してきたラタは、その朗らかで楽しげな歌声に足を止めた。

「おや、ラタ殿。早かったねえ。私の美声を披露する練習をしていたのに」

「救い」「救い」「天の救い」

鳥の姿に戻ったりネとルネが、黄色い嘴を開いて言う。二羽の言葉が聞こえぬはずはないのに、セイズには全く気にした様子はなかった。飄々としているのか、能天気なだけなのか、区別が難しい。

「その歌……」

「ああ、これかい？ これはかの昔、人と神とが離れてしまった悲しみの時に、神を想う人々へのみ残したものだよ。いつでも、必要

とする者には道が開かれるように」

「必要とする、者」

「神々のお気に入り、ラタ。つまりは君とそこ先祖たち、ということになるね」

濃紫の髪を風にそよがせながら、セイズは微笑を浮かべる。それで話を終わりにしたのか、それとも始める合図だったのか。彼は両腕を開き、鳥たちに向かって何やら目配せをした。

渋々、といった態度で羽を数度上下させた極楽鳥。リネとルネは、なんと瞬き一つする間に巨大な姿へと変貌していたのだ。ラタの肩にとまれる大きさをだつたものが、こちらが逆にその体に乗れるぐらいにまで。

驚き、声も上げられないでいるラタに、セイズが言った。

「さあ、早く乗りたまえ。ティンガが眠りから覚める前に、島をご案内しよう」

「偉そうに言うな」「命令するな」「我らは神の使い鳥」「主はゼーダ、主はゼーダ」

嫌そうに言い返しながらも、二羽とも背を向け、乗ることができるよう地に身をふせてくれる。さつさとリネの背にまたがったセイズに促され、ラタもおそろおそろルネの薄緑色の羽根を掴み、乗ることに成功した。

見る見るうちに飛翔し、上空へ舞い上がるリネとルネ。余裕のセイズとは異なり、ラタのほうは悲鳴を必死で堪え、羽根といわずその首に力いっぱいしがみついでしまふ。案の定、ルネが咳き込んで怒った。気づけば、かなりの高さでふわふわとその位置を保っている。

「苦しい、阿呆。手を離せ」

「はっ、離れたら落ちちゃう……！」

「力を緩めるんだよ、ラタ殿。大丈夫、軽く持っているだけでも落ちはしない。忘れたのかい？　ここは神の島、よもや大事な乳母を傷つけようことがあるものか」

それは、神の力が守ってくれる、ということなんだろうか。でもとラタは口ごもる。しがみつく力は緩めても、最低限、安心できるほどにつかまっていることにした。思いついた疑問に、薄茶色の瞳が翳る。

「なら、どうしてこの島だけ……？ 世界全部を守るのが神様たちの役目じゃないんですか？」

ラタの、幼いなりに真剣な問いかけに、セイズは真顔になった。なみなみと注がれた葡萄酒のような両の瞳が、ラタをまっすぐに見つめる。

「昨日、ゼーダ様も仰られたらどう？ 人は神を全知全能と崇める。自分を守り、慈しみ、いついかなる時にもその慈愛は裏切られることなどないのだと。神は人のためにあるのだと信じて疑わぬ言葉だ。まず、そこからして人は思い違いをしているのだよ」

「思い違い？」

予想外の返答に、ラタは戸惑う。そんな二人のやりとりなどまるで無視して、二羽の極楽鳥は大きく羽を動かし、前方へ進んでいく。何度も抱きつく力を強めてはルネに怒られながら、なんとかラタが眺めた下方には、

「わあ……綺麗」

透き通る透明な海の上に浮かぶ、大きな環礁。島は、ちょうどその上に平たく、楕円形に広がっている。まるで海に映る太陽の分身のように、日差しを受けてきらきらと輝いていた。鮮やかな木々の緑、白砂の輪郭、そして合間にあふれる花々の色とりどりの模様。まさに楽園という二文字がふさわしい光景を見下ろしながら、セイズがぼつりと呟いた。

「そもそも神とは何なのか。それは我々にもわからない」

「え？」

延々と続く水平線。その彼方を目で追っていたラタは、抱きついてきたルネの首から体を起こした。

（神様自身がわからないなんて、そんなのって……）

何を言っているんだろう、と内心首を傾げる。ラタの心が読めるのか、それとも察したのか　セイズはまた底の見えない微笑を湛えた。

「人間とは異なる力を持ち、異なる時の中に生き、異なる流れに抱かれて生まれ出る存在。それを神と呼ぶのならそうなのだろう。この天地にそう呼ばれるべき存在は、既に我々しかいないのだからね。だが、我々がどうやって生まれたのか。そもそも始まりとされる太陽神ゼーダ様がどのように生まれたのか。その答えはゼーダ様ご自身もお持ちではない。つまりは、我々として万能ではないということさ」

歌うように、演説を述べるように　セイズはゆっくりと、そして淡々と語る。

「だから神と人は、広義の上では兄弟のようなもの。ゆえに愛でもするし、また嫌いもする。それが自然であり、気ままな我らの姿そのものなのだよ」

「神は飽いた」「神は飽いた」「人の世界に関わることに」「人の期待に応えることに」

巨大になった分、より煩くなったりネとルネが合いの手を入れた。羽ばたきが起こす風から、濃密な潮の香りがする。

「じゃ、じゃあお供えを忘れた船が沈んだとか、そういう話はやっぱり……」

本当だったんだ、と納得しかけたのも束の間、セイズが心外だといわんばかりに眉根を寄せた。

「勘違いは困るね、ラタ殿。我々は飽いただけであって、憎んでいるわけではない。人を嫌うことはあっても、わざわざ力を振るってその命を奪うような真似はしない」

「お供えなんて勝手な習慣」「勝手な決め事」「全ては人間が始めた事」

リネとルネがまた口を揃える。一面の空と海に挟まれていたら、ラタには何が本当で何が嘘なのかわからなくなる。今まで自分が信

じていた　少なくともそう聞かされ、強いられてきた　習慣そのものが、無意味だなんて。

「神は自然を操りもするが、彼らの営みを抑え付けはしない。海は嵐と共に船を沈ませもすれば、同時にその豊富な恵みで人々を潤わせることもする。利と不利、親愛と畏怖、両方併せ持つてこそ自然だ。人々だけを愛し、自然のありのままを愛さぬというのもまたおかしい話。そうは思わないかい？　ラタ殿」

何か、大きな大きなものにくるりと包み込まれていくような感覚に襲われる。それは眼前に広がる空と海であるのか、それとも豊かに輝く島であるのか。ただ、この葡萄の神によって語られる、単純にして広大な真実であるのか。ラタにはまだわからなかった。

「同じ地に生を受けた同胞として、兄弟として　時に手を取り合い、時に転ぶ姿を見守りもしながら過ごす。そんな優しい日々を、私も思いだすことがあるよ。遙か昔、まだ神と人が共にあつた頃をね」

それだけを言って、話は締めくくられた。あとはまた冗談めかしたり、飄々とした態度で案内をされただけだった。

わかったのは、この島は小さいようでいて、とても広いのだということ。最初に流れ着いたあの浜から林、そして花園を通り抜けると例の神殿があり、あれはゼーダのための建物。他の神々はまたそれぞれの屋敷に住んでいたり、姿を隠して自身の象徴　例えばセイズであれば葡萄、など　のそばに存在していたり、各々好き勝手にしていること。常夏の島ではいつも果実は食べごろで、花々は年中咲き誇る。飲み水にできる泉や小川、それに清涼な滝まであり、大陸で育つ野菜や南洋米をはじめとする穀物まで豊富に収穫できる。それから魚だつて採れ放題。要するに　本物の楽園、である。

「あら、遅いお帰りでしたのね」

ラタに与えられた部屋　どうやら、宮殿の離れであるらしいに帰ると、サアラがぐずる赤ん坊を抱き、出迎えてくれた。変わらぬ涼やかな微笑みにほっとする前に、そのそばにわらわらと集ま

る人影に驚いてしまう。

「こ、この人たちもやっぱり……」

「ええ、神ですわ。どうにも退屈で仕方ないらしくって、新しいものには目がない方たちばかりですの」

確かにのどかで平和、揃いも揃って長寿も長寿。そんな神々の島では、娯楽と呼べるものは少ないのかもしれない。必然的に宴を好み、何か楽しみを求め。だから誰かが何かを始めるとそばで観察したり、何のかんのと講評したりもする。そういうことの大好きな人々、ならぬ、神々であるようだった。

あちらはマンゴー、こちらは椰子、そしてまた隣は……と順不同な自己紹介が始まるが、頭が痛くなったラタには覚えられなかった。「さあさ、ティンガのお世話の邪魔になります。皆さん、お引取りになって」

パンパン、と軽く両手を叩いて言い渡すサアラ。それも日常茶飯事なのか、手馴れた仕草である。ぶつぶつ文句を垂れながら神々が帰ると、やっと一息つけた。落ち着くより前に、赤ん坊のむずがる声で急かされる。

「はいはい、ファルだよ。ごめんごめん」

既に気分は、服をずらしてお乳を出す母親のよう。もちろん生んだことなどないのだから想像に過ぎないのだが。ともかく、もはや恥ずかしさもなく、サアラの前で小さな額に口づけをした。サアラのほうも、あまり気にすることなく取り込んだおむつを渡してくれた。さすがの太陽光で、すぐに乾いてしまいうらしい。温かい、気持ちのいい手触りがする。

「それで、ティンガにふさわしいお名前は思いつかれましたか？」

「うーん……それがまだ。とても興味深いお話は聞かせてもらいましたけど」

困ったように頭を掻く。鳶色の巻き毛を優しい眼差しで見ているサアラは、昼食を用意すると言って出て行った。壮大に過ぎる話を聞いたからなのか何なのか、あつという間に眠りに吸い込まれてし

まう。瞳を閉じたラタの腕枕には、当然のように赤ん坊がいるのだ
った。

夢の中、同じ鳶色の髪と瞳を持った母親が、ラタをあやしている。
幼い、まだよちよちと歩いては転ぶ年頃の自分だ。もちろん、記憶
になかったはずの光景。

輪郭も顔かたちもはっきりしないのに、夢の中のラタは母親だと
認識している。あふれる愛情のままに抱きつき、その胸に身を預け
ている。母の口から聞こえてくるのは、優しい優しい子守唄。耳朶
に染み込むような声と言葉をたどろうとしたら、大きな泣き声が夢
をかき消してしまった。ティンガが目を覚まし、泣いているのだっ
た。

この島にやってきて、既に何日が経過したのか定かではない。サ
アラに聞けば教えてもらえるのだが、すぐに忘れてしまふ。それぐ
らいに日々は同じことの繰り返しで、また昼夜も曖昧になっていた。
ただ、泣かれればファルを与え、おむつを換え、洗濯をし、また部
屋の掃除もする。ともすれば自分の食事すら忘れそうになりながら
も、サアラに勧められるから食べる。けれど、それより何より空い
た時間は眠っていたくらいに疲れている。それが、ラタの正直な
気持ちだった。

(赤ん坊の世話が、こんなに疲れることだなんて……)

知らなかったとはいえ、甘く見ていた。可愛いと愛玩できるのは、
自分に余裕がある間だけなのだった。雑多な仕事を終え、やっと眠
りかけた頃に泣き声で起こされ、また、ファルを与えたのにも関わ
らずぐずられ、理由のわからない泣き方に振り回される。

ただ抱いていてほしいだけなのだと気づけるまで、かなり消耗し
た。サアラに言わせれば、抱き癖が付いたのだとか何とか。けれど
も可愛さのあまりに当初やっていたことが裏目に出たのだから、こ
れも自業自得かもしれない。

あまりの眠さと疲労に、赤ん坊を抱っこしたまま長椅子に腰掛け、

うつらうつらしたこともあった。こうなると、ファルマも何も放り出して、いつそ逃げてしまおうかとまで思ってしまう。なんで自分と何の関係もない赤ん坊を必死で世話し、育てなければいけないのかと。夜中に、明け方に、泣き喚く赤ん坊の口を塞ぎたくなることもしょっちゅうだった。それでもなんとかファルを与え続けたのは、その瞬間にだけ感じる優しさや温かさを味わいたただけだったのかもしれない。

世の中の母親という母親を全員尊敬し、自分ではこれ以上無理だと思った。そんな朝、サアラが知らせにやってきたのだった。今日、ラタが島にやってきて一週間目のこの日が、赤ん坊の名付けの儀を行う日なのだということ。

「あら、ティンガ……首が据わってるんじゃないやありません？」

例によって何枚もたまった使用済みおむつにうんざりしていた時、サアラが言った。

「え、あ 本当だ」

いつものように首の後ろを支えようと入れた手から、赤ん坊の頭が少し浮いている。自分で力を入れている。つまりは、首が据わったのだ。いつのまに、と驚くラタに、サアラが微笑む。

「これで縦抱きもおんぶもできるようになりましたわね。赤ん坊の成長は早いと言いますけれど、ことにティンガの場合は人の何倍もですから、あつという間ですわ」

常と同じ明るい太陽光が差し込む部屋。白い大理石がきらきらと輝き、そこに埃一つないことに気づいた。誰も手伝ってくれないことにひそかに腹を立てていたのだが、余裕のないラタに代わっておそらくはサアラがやっておいてくれたのだろう。

(本物の母親なら、誰も代わりはいないんだ)

育児一つをとってもこれほど大変なのだ。その前に出産の苦しみを味わい、更には料理に洗濯、掃除に赤ん坊と家族の世話。その全てを一人でやる母親たちは、どれほどに辛い思いをしているのだろうか。記憶にないとはいえ、ラタにもいた『母』という存在を

唐突に想った。

（僕なんて、たった一年世話をするだけなんだ。しかも、普通の人間に比べてあつという間に成長してしまう）

裏返せば、こうしてファルを与え、胸に抱き、あやしてやれるのは長い人生の内、ほんのわずかな期間でしかないということなのだ。寝不足や疲労に負け、惰性でファルをあげてきたこと、それでもなんとか栄養になってくれていたことに感謝し、申し訳なくさえ思った。ラタの心を知らない赤ん坊は、無邪気に笑いかけてくる。きらきら、きらきら やわらかい金色の髪が光に映え、眼差しにも同じ色がゆらめいて。

（可愛い……）

改めて、気づいた。純粹に、この子にふさわしい名を 一生を託せる名前をつけてあげたい、と思えた。そして、思い出したのだ。夢の中で聞いた、母の子守唄を。

「夕刻に宴が開かれます。島に住む全ての神々を集めたその場で、名付けの儀式を執り行うためです。どうかラタ様の思いのままに、素晴らしい名を付けて差し上げてくださいませ」

お辞儀し、去っていくサアラを見送るラタの瞳は、ようやく確かな光を取り戻していた。

そして訪れた夜、ゼーダの神殿で宴は始まった。

山と盛られた美味なる料理の皿に、たわわな果実と豊富な酒。神たちは食物なしにも生きてはいけるが、楽しみのために摂取するのだという。

（確かに おいしいものは人を笑顔にするからなあ）

人間も神も、その点ではまるで同じということか。神々と人のために、美味という楽しみを別の誰かが与えたみたいにも思えてしまう。

とりとめもないことを考えていたラタは、自分の衣装を見下ろし、表情を引き締める。それはいつも身につけていた腰布ではなく、神

々のまとう純白の衣服で、自然と緊張感を与えるものだ。それだけでなく、宴もたけなわという頃にはいよいよ儀式が待っている。そして そばで眠る赤ん坊に付ける名は、もう決めてあった。

「さて、ファルマのラタよ。そろそろそなたが決めた名を聞こうか」
声をかけたのは、豪華な台座にゆつたりと腰かける太陽神、ゼーダ。彼女のまばゆいばかりの黄金の髪は輝きを失わない。あたかも昼間のうちに、光を一手に集めておいたかのように。光と対比する浅黒い肌は逆に夜の色になじみ、余計に嫣然として見えた。

「はい、ゼーダ様……ですが、一つだけお願いがございます」

わずかに震えていた手は、小さな小さな赤ん坊をちらりと見たこととで落ち着いた。あの頼りなく、それでいて強い生き物 大切に愛しい神の子を今託されているのは、ほかでもない自分なのだから。ファルを与える時のように、まだ手馴れぬ仕草で抱く時のように。そうつと、精一杯優しくテイニングを見守りながら、ラタは言った。「名付けを行うにふさわしい場所へ、移動させていただきたいのです」

片方の眉を上げ、わずかな驚きを垣間見せたゼーダはそして、面白そうに頷いたのだった。

全てを照らす金色こんじきの太陽。その強い明かりに代わって夜を包むのは、穏やかな月光だった。打ち寄せる波の規則正しい音が、かろうじて耳に届く。この花園はラタが初めて島にやってきた日に通った場所であり、それ以来訪れていない。にも関わらず、夜風にさやさやと揺れ、互いに囁きあうような花々はどれも、ラタを優しく迎えてくれている気がした。

（この花一つ一つにも、神様がいるのかな）

噴水の見えるあずまや。それを取り囲むようにぐるりと存在する多くの神々は、まだ名前も正体も覚えきれていない。だからわからないのだが、どちらであっても見守ってくれていればいい、とラタは思った。

「では、ティンガをこれへ」

蔽かにさえ響く、落ち着いたゼーダの声。宴の時とは似ても似つかぬ、まさに最高神らしい威厳ある姿だ。声に応え、揺りかごから赤ん坊を抱き上げたサアラが、まずゼーダに。そしてゼーダの手からラタへと渡された。

無垢な心そのものを表すような純白のおくるみに包まって、まだ眠そうな目をこするティンガ。小さなその手も体全体も、やわらかい月光が照らしている。ラタは決意を固め、深く息を吸い込んだ。「神の島ティンガタンガに生まれた聖なる赤子、この新たな命に名を」

金の瞳で見つめ、ゼーダが促す。自然と沸き起こった衝動から、頬に優しくファルを与え、ラタは口を開いた。

「神の子ティンガに、ファルマより名を呈します。彼女のこれから的人生が、鮮やかな色で幸せに彩られますように。その名を　二ーナと」

「二ーナ」「二ーナ」「花だ」「はじめの花」「阿呆にしては考えた」「上出来、上出来」

どこに隠れていたのか。花畑から一斉に飛び上がり、騒がしく鳴きだしたのは極楽鳥たちだった。今までぴんと張りつめていた夜の空気が、急激に緩んでいく。

そのけたたましさに悪意がひそんでいなかったことと、神々から拍手と歓声が起こったことにラタはほっとして　そのままへなへなと座り込んでしまった。まだ細い両腕に神の子、二ーナをしつかりと抱きしめながら。

古き時代、まだ人と神が親密であった頃の名残。それがラタの子孫に受け継がれた子守唄であり、語り部によって伝えられた物語であり、神話であった。ほとんどが廃れ、忘れ去られていった中、ひっそりと受け継がれた言葉。ラタが夢の中で聞いたのは、こんな歌だった。

緑の大地に一滴、光の粒が落ちてきた。太陽の色したその粒は、種になり、芽を出し、はじめの花になった。はじめの花が一つになり、二つになり、ついには一面の花畑が生まれた。花は色、花は光。花は笑顔を運んでくる。だから愛しい子には花の種を、恋しいあの娘に花束を。贈れば幸せふくらむ花になる。はじめの花の、次になる……。

どうしてだかあの時 赤ん坊を、ニーナを心から可愛いと、愛しいと思えた瞬間に思いだしたのだ。この歌に母の想いが込められていたこと、はじめの花が古き言葉で『ニーナ』と呼ばれていたことまでを。

(不思議だ……でも、喜んでもらえて本当によかった)

一番嬉しいのは、自分なのかもしれない。単なるティンガ、赤ん坊。それだけでない、たった一つの名前をあげることができた。その名を呼び、これからも世話をすることができるのも。

「あーっ、また！ 今おむつ換えたばかりなのに！」

洗濯したての清潔な布をあてたそばから、透明な雫がしたたたく。可愛い桃のようなお尻からは、あの『蜂蜜』のおまけ付きだ。いくら匂いもなく汚くもないといっても、こつ何度も連続してされてはため息も出るというもので。

「ふふ……でもラタ様、顔が笑っておりますよ？」

もう夜も更けて、月明かりの満ちた部屋にはラタとサアラと

ニーナだけ。くすくす笑いながらサアラが部屋を出て行くと、ラタは今度こそ自覚済みで破顔した。

(だって……可愛いんだもん)

水で塗らした布で、お尻を拭いてやる。そうするとくすぐったいのか足を持ち上げ、気持ち良さそうに伸びをする。小さくても五本ずつ揃った手足の指がきゅっと縮んで、ニーナが真正銘『人間』なのだと感じるのだ。

もちろん神の子であることはわかっているけれど、今はほぼ人に近い。卵から生まれた赤ん坊。それが一步一步、一人前の生き物に

なるために成長している。その息吹を肌で感じながら、ラタは裸のニーナを抱き上げた。

（大きくなるんだぞ、ニーナ）

そう、少しずつ着実に　　すくすくと育って、立派な成体に……大人の神に。

「え、大人……？」

待てよ、と今の今まで考えもしなかった一年後を思い描く。いや、一年と言わずあと数ヶ月もすれば、ニーナは自分と似た年頃の少女に育つということだ。

「え、えーっと　　」

ぽちゃぽちゃと、やわらかい素肌。こういう赤ん坊の姿であるうちはいいとして、その先も自分がこうして服を着替えさせたり、ましてや沐浴させたりなんてことに　　？

「いやいやいや……さすがにそれは」

ぶんぶん、と頭を振って、思考を停止させることにした。まだまだ先の話だ。そこまで考えて、何も今から戸惑う必要もないではないか。

そう思う心と裏腹に、なぜか妙な汗をかいてしまう。ラタの複雑な心理状態を知らないニーナは、ファルを求めてぐずりだし　　また終わりのない、赤ん坊との戦争が始まったのだった。

二週間後。少しずつではあるが、夜まとめて寝てくれるようになったニーナを相手に、ラタも人間らしい起床時間と生活を取り戻した頃のこと　　。

「え、離乳食……？」

最近では縦抱っこでないとぎゃあぎゃあ言うようになってしまったニーナをあやしなから、ラタは頬を引きつらせた。

（ファルとおむつ換えの間隔も開いて、やっと一息付けたっていうのに）

また別の仕事が増えるとは　　そんな内心を見透かしたかのよう

に、サアラが苦笑する。彼女が何かなだめようとする前に、開いた窓からバタバタと羽音の来訪が。

「文句あるか」「文句文句」「ゼーダ様に言いつけるぞ」「言いつけるぞ」

声の正体は聞かずともわかる。神の子ティンガ、ニーナの乳母を務めるラタの世話役　のはずの　極楽鳥たち。最初からやる気はなかったが、近頃ではラタを餌にからかうことに飽き足らず、中途半端な監視役のつもりでさえいるらしい。辟易としつつも、この晴天と明るい島の生活では、怒る気もすぐに失せてしまうのだ。

「文句なんて言つてないよ。ただ……神の子にもそんなのが必要なのかって驚いただけで」

ラタの言い分に、サアラが頷いてくれる。補佐役の彼女だけが、目下のところラタの明確なる味方な気がした。もちろん、自由奔放な神の気質がサアラにも息づいているのは確かなのだけれど。

「初めに申し上げた通り、ティンガは人とはぼ変わらぬ成長を追ってゆきます。だから歯も少しずつ生えてきますし、それゆえにものを咀嚼するための練習が必要なわけですね。といいますが、も人の子のようにお乳を飲むわけではないので、『離乳』とは呼べませんね」
それに代わる呼び名などを律儀に探してくれようとするサアラに笑って、ラタは手を振った。

「いや、いいです。わかりやすいし、離乳食で。って言っても何がいいのかはさっぱり……薄めのスープとか、お粥とかなのかな？」
「それに関しては、ちょうど適任の者がおりますからお手伝いできると思いますわ。ただ、作るのはラタ様ご自身でないといけない、というのがティンガとファルマとの契約上の　」
「うん、もうわかってます。できる限り、ニーナの面倒は僕が見るんですよね」

皆まで言うな、と微笑んだラタに、サアラが満足げに頷いた。

それから、ラタの離乳食作り　と同時に格闘が始まった。

明るくなるとニーナは目覚める。だから、調理はそれまでに済ましておかないといけない。もちろん食卓も万全に整えて、すぐあげられるように準備をする。

そしてニーナが起床。おむつ換えに着替え。洗顔や沐浴などを済ませたところでまず、薄めにこしらえたスープを一口。海に囲まれた島であるだけに、新鮮な魚介類で出汁を取ったものならなお良し。もしくは、島の畑で育った野菜をくたくたに煮込んだスープでも可。ただ、南洋米で炊いたお粥は常備しておくこと。甘味にはエル椰子の汁を。しかしお腹を壊さないよう、量は控えめに。

日数が進むごとに口にする食材を増やし、また、素材の切り方や味付けなども徐々に大きく、濃く。本格的な食事に進む前の訓練になるように試みることに。大体のものが咀嚼できるようになったら、ひと月（人の年で一歳）を目安に普通の食事を与えていく。

やることはきつちりと頭に入っている。また、初めは大変だった煮込み加減や下ごしらえ、それに他のお世話との兼ね合いなども都合を付けられるようになった。それなのに……。

「食べてくれないんです……！」

さじを手に奮闘を続けていたラタは、頑固に口を閉じ、全力で食事を拒否するニーナに疲れ果て。ついには食卓に突っ伏してしまつた。そばで見えていたサアラはいつもの優しい微笑を浮かべ、同情を含んだ目つきをする。それだけならまだ気も休まるものを、例によつて姦しい極楽鳥の二人、もとい二羽組が嬉しそうにはやしたてるのが問題だった。

「負け」「負け」「ラタの負け」「お前の料理が不味いから」

さも楽しげにそばで歌われるのだから敵わない。しかも、すっかりお座りが上手になったニーナが喜んで手を叩くのだ。ラタもこれには参ってしまった。

「ま、ずい　んでしょうか、やっぱり」

半分涙目になりながらむくりと体を起こす。「そんなことありませんわ、おいしいです」とこれまたいつも通りにサアラが励まして

くれるが、今日に限ってはこれも効かなかった。切り方を変えたり、見た目を工夫したり、また食器を色鮮やかなものにしてみたりはたまた、ラタも一緒になっておいしそうに食べてみる、なんてことまで。できることは全部試し、努力を続けた。なのに、なんとかちよこちよこ食べてくれてはいたニーナが、ここ数日口を開けようともしなくなってしまった。

(一体どうして……何が悪いって言うんだよー！)

鳶色の巻き毛を、更にぐしゃぐしゃと掻き乱して叫びたい気分である。が、どんだん金の髪も伸び、今ではちよこんと小鳥の尻尾のように結べる長さになったニーナは、態度とは逆にますます愛らしくなるばかり。

(怒りたいのに怒れない)

これこそが現在のラタの、最大の悩みだった。

「あんれまあ。また食べてくれなかつたんですかい」

大型の打楽器みたいな低くて太い声が、部屋に流れてきた。振り向いた先に見つけた救世主　であったはずの存在を見とめて、ラタはわっと泣きつく。

「そうなんですよードンポポさん。なんとかしてくださいよー！」

一種珍妙にも響く名を持つ大柄の男は、台所と食卓の神。ラタの離乳食作りを助けてくれる存在だ。首元や頭に、月桂樹の葉で作られた飾りを付けている。アイマスがかまどの上に月桂樹の葉を飾り、何やらお祈りらしき言葉を呟いていたことがあったことを思い出す。あれは、このドンポポへ捧げられた祈りだったのかもしれない。

「うまいもんは、幸せを呼ぶんです。本当にうまいもんには、作る人の愛がたっぷり入ってますからなあ」

のほほんとした言葉で返すこの神には、どこか人を温かい気持ちにさせる雰囲気があった。図体や野太い声に似合わぬ、糸のように細い瞳が妙に可愛い。

(愛情……込めてるつもりなのにな)

しょぼん、とうなだれるラタ。はやしたてるリネとルネ。困った

顔で見守るサアラにドンポポ。そして。

「あつー。ぱー」

鈴が転がるような笑い声を立てて、お喋り絶好調のニーナ。顔を上げて見ると、散々格闘した後の食卓が更に、ぐちゃぐちゃにひっくりにかえっているではないか。

手足の動きも発達してきたニーナが粥の入った椀を裏返し、スープ皿に手をつっこみ、拳句の果てに全部ごちゃ混ぜにしてバンバン叩いている始末。かなり温厚な性格のラタも、これにはカッとなってしまった。

「こらっ！ ニーナ！」

ぺちんと手を叩いて怒鳴る。瞬間、黄金色の両目が大きく見開かれ、そこからぶわっと大粒の涙が。

「あー……ごめん、怒鳴って悪かったよ。ニーナ、ほら、おいで。きれいきれいしよう？」

すっかり身に付いた赤ちゃん言葉で声をかけるも、ぷうっと頬を膨らませたニーナの驚愕と怒りはおさまらなかつたよう。思いつきりそっぽを向かれてしまった。

「たつた、ばあー、ぶーっ！」

何かわからないが、文句を言っているらしいことだけはわかる。

ため息を付いたラタに代わり、サアラが汚れたニーナの体や衣服を綺麗にしてくれた。

「阿呆」「阿呆」「やっぱり阿呆」「ファルマ失格」

「……うるさーいっ！」

こんな風にからかわれることも、ニーナに手こずらされることも、既にラタの日常と化してきているというのに。なぜだか今日はとても空しくて、やりきれなかつた。ついに叫んだラタは、さえずるのをやめた極楽鳥と二人の神の目線に耐え切れず、部屋を飛び出してしまったのだった。そう……ニーナを置き去りにして。

空は真っ青で、果てなく高い。海はそれを映す鏡であるかのよう

だ。

肌を撫でる潮風も波の音も、何もかも平和で、変わることはない。ティンガタンガの一部。全ては美しく調和の取れた完璧さで、いつもならば癒されるはずの風景だ。なのにささくれ立った今の心には、余計郷愁をかきたてるだけの疎ましいものに思えた。

「帰りたいな……」

そう呟いてから、自問自答する。どこへ？ 奴隷の子ラタに戻れば、すぐに売られるだけ。自身の希望とは裏腹に働き続けるだけじゃないか。ただ主が、人か神かであるだけの違いだ。

ふつと苦笑したラタは、立てた膝に顔を埋めた。腕からも体からも、ほの甘いニーナの香りがする。蜂蜜に似た排泄物の、ではなく、乳児独特の優しく懐かしい芳香だ。

くん、と習慣で嗅いでしまった。当のニーナに腹を立てて出てきたはずなのに、この匂いにまた癒されている自分がいる。海が一望できる花畑。ニーナの名付けを行った場所で、花々を見るともななく見回していたラタを呼ぶ声。

「サアラさん？」

振り返ると同時に、ラタの瞳が大きくなる。予想もしなかった光景を目にしたからだった。

「ラタ様、ご覧下さいませ」

穏やかにそう告げるのはサアラで間違いない。隣にドンポポが、ついでに言えばセイズや極楽鳥がぞろぞろと付いてくることは置いておくとして。

「ニーナ……!?!」

たった今まで思い悩んでいた事柄の、張本人。それが、花畑の間に伸びた白い小道にちょこんと座り込んでいる。腕に抱くか、紐で背におぶって散歩したことはあるが、一人で。そばで支える相手なしにニーナがいることは、全く初めての事態だった。

「あ、危ないよ。なんで？ ちゃんと見てあげなきゃ」

あわてて駆け寄ろうとした瞬間、ラタの足が止まった。座ってい

た体勢から、ニーナが動いたからだ。ぺたり、ぺたり。最初はおっかなびつくり、そしてすぐに調子を得て。ゆっくりゆっくりと、こちらに向かってハイハイしてくるのだ。

「ニーナ……！」

驚愕と歓喜が、じわじわと込み上げる。胸がドキドキして、うま
く声が出なかった。

ただ同じ眼差しを求めて周囲を見渡すと、サアラも、他の面々も笑っている。

「おいで……ニーナ！」

永遠のように思えた初めての『歩み』を迎えるラタの両腕は、かすかに震えていた。自分の元へたどり着いた時の、自慢げに輝く瞳綻ぶ顔。浅黒く、まだ頼りない両手がまっすぐ伸ばされ

「たーた」と朗らかにラタを呼んだ。

泣き笑いを浮かべ、くしゃくしゃの顔で愛しさをあらわにしながら、ラタはニーナを抱き上げる。抱きしめ、触れ合わせた頬からは、甘い匂い。はじめの花の、優しい香りが漂っていた。

結局、何が原因だったのかわからないまま、離乳食との格闘は幕を下ろした。時は瞬く間に過ぎ行き、ひと月が　ニーナが人間で言うところの、一歳を迎えたのである。

急がない。期待しすぎない。ニーナなりの歩みを見守ってやる。いらいらするたびにその三つを胸に刻みつけ、日々を過ごした。

そのうちに少しずつできることが増え、気づけばぐんと成長している。そしてついに　ある日突然、離乳食もガツガツ食べ始めるようになったのだ。

「食べたらファルをもらえない、って思ってたのかもしれないよ？」

今夜予定されている祝賀の宴用にニーナの髪を結いながら、サアラが言った。

「まさか　そんなことまで考えるかな？　こんな赤ん坊が」

「まあ、ニーナ様はもう赤ん坊ではありませんわ。人間の数え方も、一歳からは幼児になるのでは？」

「そりゃ、そうかもしれないけど……」

首を捻るラタの目には、まだまだ赤ん坊の続きにしか見えない。現に、手足だけ少し長く、体つきもほんのちよつとだけ『人間』らしく成長したニーナは、満面の笑みで両手を伸ばしてくる。

「たーた、ふぁー」

これがラタに、ファルをねだる時の言葉だ。乳母の自分をしっかりと認識し、欲しいものが片言でも言えるようになったことはめざましい進歩だけれど。

「はいはい、ファルね」

えくぼの浮いた小さな頬に口づける。満足げにニコニコする、白いドレス姿のニーナは、乳母の欲目を差し引いてもさすがに神の子。(可愛い……！)

日に何度も実感する想いが、またラタを包み込んだ。これが幸せ、というものなのだろうか。まだおむつも取れていないくせに、髪を結われたニーナはちよつと大人になった気味でいるらしい。ご満悦で手鏡を覗き込んで、にんまり笑っている。

「おや、少し見ぬ間に赤子が幼児になつておる」

可笑しそうに、完全に客観的感想を述べてくれたのは。

「ゼーダ様」「太陽神ゼーダ様」「お目見え」「お目見え」

パタパタ天上付近を飛び回る極楽鳥が言う通り、最高神と謳われる美貌の女神、ゼーダだった。麗しい黄金の髪が、艶やかな肢体と美貌を際立てる。

「今日は何かの日だったかえ？ 皆勢ぞろいしておるのう」

「ゼーダ様……ニーナの、ティンガの祝賀の宴です」

半分以上呆れながらも、ラタはあくまで恭しく説明した。ここまで奔放にして自由な神ではあっても、あふれる威厳とさすがの神々しさには自然と頭が下がるのだ。

「おお、そうかそうか。それはご苦労。ファルマのラタよ、これが

らもティンガを　　ニーナをよろしく頼むぞ？」

「は、はい　！」

人間で言うならば、母である存在。そちらを慕うのが自然であるはずだが、やはり日々一緒にいるラタのほうにニーナは懐いている。突然のゼーダの来訪にも、きよとんとしているばかりだ。それでもゼーダは微笑み、優しくニーナの頭を撫でた。

「瞳を見ればわかる。良い子に育っておるな」

いつだったか、あまりに我が子へ関心を示さないゼーダに疑問を抱いて、ラタが訊ねたことがあった。自分の産んだ子が本当に気にならないのかどうか　　。

が、サアラの返答は、想像できるどんなものとも違っていった。

神の卵は、直接ゼーダが産むのではない。

さいはての神の島、ティンガタンガ。豊かな海と自然そのものに抱かれて、卵は百年に一度海面から浮上する。それがどこから来て、どこから生まれたものなのかは誰も　　ゼーダとて知らぬ謎なのだと。

更に最近知った話では、そのようにして生まれるのは太陽神の子だけで、その他の神々にはあてはまらない。セイズやサアラのような果実の神ならばその木から、台所と食卓の神ドンポポの場合はその場所から　　というように、自然に宿るべきところから生まれ出る存在なのだそうだ。つまり、卵として生まれ、人に育てられるのもゼーダの血を引く神の子ティンガのみ、というわけで　　既にラタの理解を大きく超えている。

小さなため息は、誰の耳にも入ることはなかった。大広間の、滑りやすい大理石の床をすごい光速で這い進んでいたニーナを除いて、だが。

「たーたっ！」

笑顔の花が咲き、毎度の突進が始まる。這うことに疲れたのか、突如として体を起こしたニーナはそばの椅子につかまり、立ち上がり　　そして、一步を踏み出した。

「あ……歩いた！ ニーナが歩いた、歩きましたっ！」

「本当でございますか？ まあ、それは更にめでたいこと……」

「歩いた」「歩いた」「祝賀」「祝賀」

「ふむ、見た目だけでなく中味も、それなりに成長はしておるのだな」

「やはり、私の惜しみなき情熱と指導が身を結んだのですねえ、ラタ殿」

「うまいもん、幸せ運んでくる」

口々に色々なことを好き勝手に言う神々と、たった一人の人間ラタ。部外者であったはずの彼こそが、一番喜んでいることは間違いなかった。

「ニーナが歩いた……」

「泣いとる」「泣いとる」「阿呆が泣いとる」「やっぱり阿呆、フアルマは阿呆」

熱いものがみるみるあふれる瞳を一番見られたくない連中に見られ、ラタは頬を染め、顔をしかめた。しかし 再び飛びついてきた彼の大切な宝物に、また泣き笑いになるのだった。

「たーた、ふあーっ！」

ちようだい、と全身で求めるニーナに急かされ、ラタは唇を近づけて。幾度となく繰り返されてきた愛の印が、また交わされる。

（神々もこの島も、わからないことばかりだけど……ま、いっか）
常と同じく思考をそれだまためて、ラタは微笑んだ。

。 宴も何もそっちのけの、乳母と主の蜜月はまだ、始まったばかり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9881x/>

ティンガタンガ～さいはての神の島～

2011年10月28日11時16分発行